

16世紀イタリアの建築家 V.スカモッツィの建築理論に関する歴史的見解について*

下川 勇^{*1}

About a Historical View on the Architect V. Scamozzi's Architectural Theory in the 16th Century Italy

Isamu SHIMOKAWA^{*1}

^{*1} Faculty of Engineering, Architecture and Civil Engineering

This paper aims to make clear the historical evaluation about the architectural theory of the architect Vincenzo Scamozzi in the 16th century Italy. In the 16th century, Italy pushed forward the universalization of the concepts that integrate each art. Yet, Scamozzi constituted a logic that puts Architecture in a high position and puts Painting/Sculpture in its subordinate position. In this logic, the concept that has an important role is “scienza”. Architecture becomes a more excellent art than Painting/Sculpture, on the condition that it secures the inevitable relationship with the scienza. Scamozzi's architectural book “Idea della architettura universale” is the concept that was composed by the scienza. This paper makes the historical value about the architectural book which proves such thing clear.

Key Words : Vincenzo Scamozzi, Architectural Theory, Architectural Book, 16th Century Italy

1. 緒 言

圧倒的な作品の力で古典的規範からの逸脱を正当化したミケランジェロの足跡を追って、数多の芸術家たちがルネサンス様式に代わる新たな作品を世に生み出していった。16世紀イタリアとはこうした芸術様式の大転換期の舞台であった。ヴィンチェンツォ・スカモッツィ（1548-1616）は、この時代の流れに抗うかのように古典的なものに執着し、4半世紀をかけて建築理論書『普遍的建築のアイデア』（1615）を執筆した。

本稿は16世紀という特徴的な時代にあって、この著作の価値すなわち彼の建築理論の存在意義を確認するために、16世紀から20世紀にかけての歴代の評論家の見解を網羅的に記すものである。各年代または学派によって評価の傾向に偏りはあるかも知れないが、その偏りもまた歴史的見解の事実として、スカモッツィの建築理論構築の背景および執筆者としての性質が明らかにされるだろう。

2. 16世紀の評論家の見解

本稿は各時代の評論家がスカモッツィを評したその内容を確認することを目的にしているが、歴史的出来事に対する確認作業は一般的には伝記に頼らざるを得ない。紀元前2世紀以来、有力者を讃える伝記はしばしば著されてきたが、16世紀においてジョルジョ・ヴァザーリは数多くの建築家に固有の価値を付与するという新しい伝記記述の形式を後世に示した⁽¹⁾。執筆年代の関係から、この伝記にはスカモッツィの頁はないため、結果としてスカモッツィ伝は18世紀のフランチェスコ・ミリーツィアを待たねばならない。次に紹介する2名の評論家は、こうした歴史的経緯から見ると伝記記述者ではなく、書簡によってスカモッツィ

* 原稿受付 2016年2月25日

^{*1} 工学部 建築土木工学科

E-mail: shimokawa@fukui-ut.ac.jp

を評した人物に位置づけられる。

2.1 ロドヴィーコ・ロンコーネの評論

ロンコーネはスカモッツィと同時代人であるため、その評価は直接的で重要である。スカモッツィが父親のジヴァンニ・ドメーニコとともに「極めて詳細な目次 (Indice copiosissimo)」を加えたセールリオ全集⁽²⁾を刊行する際、ロンコーネは建築書の監修者として著名なフランチェスコ・デ・フランチェスキに宛てた手紙においてスカモッツィを「特筆すべき卓越した知性をそなえた・・・我々の時代のウィトルウィウス」として評価している⁽³⁾。このような評価を他者に向けるとなれば、そこにはよほどの理由があったに違いない。スカモッツィとドメーニコが編集したセールリオ全集の初版は1584年に出版されているが、このことからロンコーネがスカモッツィに出会ったのは1584年以前のことであることがわかる。スカモッツィは1578年から2年間ローマ旅行を行っていたので、1580年から1584年の間の出来事であったことがわかる。ロンコーネはその書簡において「ヴィチェンティーノ・ピットーニの図版を載せた彼の論考」⁽⁴⁾と述べており、この時期のスカモッツィは『ローマの遺跡に関する論考』(1582, 以下『論考』と記す)を執筆し、出版している。この『論考』はスカモッツィがローマ旅行を経験した後に著したものであり、それ故にローマ旅行はスカモッツィにとって重要な意味をもつものであったと見なされる。このローマ旅行は建築家に必須の知識とウィトルウィウスから受け継いだ精神とを確立するための機会をスカモッツィに与えたとされる⁽⁵⁾。このことから、ロンコーネが円熟した青年期を迎えていたスカモッツィに出会っていたことが推察される。恐らくロンコーネは豊かな知識とウィトルウィウスを基礎においた思考とをスカモッツィに垣間見て、ウィトルウィウスとの同一性を看取したものと考えられる。また、ロンコーネは同じ書簡において「建築家としての彼の優秀さを間もなく幾つかの建築の書が証明するであろうし、図版が示す遠近画法の書もそれを証明するであろう」⁽⁶⁾と評している。この「幾つかの建築の書」とは紛れもなくスカモッツィの代表的著作『普遍的建築のアイデア』(1615, 以下『アイデア』と記す)であり、「遠近画法の書」とはミリーツィアがスカモッツィ伝においてその消失を証明した『遠近法に関する論考』(1575)を指している。

2.2 ジローラモ・ポッロの評論

ロンコーネと同じくポッロもまた、スカモッツィと同時代人である。1581年にジャコモ・コンタリーニに宛てた手紙においてポッロは、ローマから帰省して間もないスカモッツィについての印象を語っている。「これらの素描に何らかの表明をもって精神を付与することは私には必要なことのように思われる。なぜならば、この若者が単に画家としての能力を有しているだけではなく、建築家としての能力をも兼ね備えているからである。この主張の根拠を見出したとき、私の幸運が建築家ヴィンチェンツォ・スカモッツィ氏とお話する機会を、氏がローマから帰省されて間もなく、この町に身を落ち着かせることに専心されていたときに、もたらしてくれた」⁽⁷⁾。この書簡の内容は、後に『遠近法に関する論考』の冒頭に付記されることになったが、このことからポッロとスカモッツィの親交の深さが窺い知れるであろう。この一節からは、ロンコーネと同じくポッロが、建築家としてのスカモッツィに高い評価を与えていることが窺え、その評価の基準も両者に共通している。また、次のポッロの言葉には、古代の作家に対するスカモッツィの理解のほどが窺い知れる。ポッロ曰く「(スカモッツィは)大変美しい秩序をもって古代の作家たちの権威とともに各時代に表出し、既にローマが有している古代の遺跡を論じる」⁽⁸⁾。このポッロの一節によって、スカモッツィは単に教養があるばかりではなく、碩学の建築家として知られるようになるのである。

3. 18世紀の評論家の見解

3.1 フランチェスコ・ミリーツィアの評論

ミリーツィアは18世紀イタリアの啓蒙主義の環境下で教育を受け、厳正な批評家・理論家として影響力を誇った。大著『公共建築の原理』の確立に影響したとされる『各時代・各国における偉大な建築家の生涯』いわゆる『建築家列伝』の中で、「ヴィンチェンツォ・スカモッツィ」という頁を割り、スカモッツィの建築家としての経歴のみならず、建築理論の価値を裏付ける内容にまで踏み込んで評論している。

ミリーツィアの語る史実は、およそ『アイデア』から得たものであると考えられる。なぜならローマ旅行の内容、建築の設計に関する情報、そして建築書に関する詳細な内容などは、スカモッツィ自身が述べているところであるからである。しかしながら特筆すべき事柄は、ミリーツィアが伝記を纏め上げたこと以上に、史実の間に垣間見ることのできる、ミリーツィア自身の所感である。

現在の専門家の間ではスカモッツィの建築理論は低評価であるが、これはスカモッツィの建築家としての価値を貶めたとされるイニゴー・ジョーンズの「このスカモッツィという不可解な男は、愚鈍で何もわかっていなかった」という言葉に類するものであろう。だがミリーツィアは、スカモッツィの青年期の卓越した建築家としての能力を認め、さらに建築設計活動やローマ旅行の充実した内容に肯定的であった。「スカモッツィは卓越した建築家であり、並外れた功績を残した。彼の諸々の作品は、簡素で、威厳に満ち、誠実である」⁽⁹⁾という賛辞はミリーツィアのスカモッツィに対する総評と言える。

しかしミリーツィアは16世紀の評論家のようにスカモッツィを誉めそやすばかりではなく、厳格にも欠点を指摘している。「虚栄心は彼の短所を形成し、彼に抑制ばかりか秩序をも持たせることができず、博学ぶりを気取った『普遍的建築のアイデア』を飾り立てたるよう搔きたてた」⁽¹⁰⁾。このミリーツィアの「虚栄心 (vanità)」は、後にスカモッツィの負の代名詞となり、我々の時代にも伝わっている。

3.2 トーマッソ・テマンツァの評論

ミリーツィアに多くの示唆を受けていたテマンツァは、ミリーツィアと同様にスカモッツィを酷評している。テマンツァ曰く「それは博識で満ちた虚辞であり、しかも大部分が不可解であり不適切である」⁽¹¹⁾。これは『アイデア』への評価を述べた一節であるが、一方では次のように高評をも与えている。「その目に映る如何なるものに対しても彼は熟考した。役に立たないと思われるものでも、古代の遺物についても、彼は熱心に調べ、それらを理解していた」⁽¹²⁾。さらには「これらのことから（スカモッツィの著作を研究したことから）、我々の建築家がウィトルウィウスを大いに研究し、それを大変よく理解していたことがわかる。私はスカモッツィの名前が最初の頁に記されている彼の使用していたその他の幾つかの書物を所有している。これらにあっても彼の手書きの注釈が添えられている。明白と思われることは彼が偉大な熟考をもってこれらの書物を精読していたことであり、更にはそれが大いなる成果に結びついていることである」⁽¹³⁾。テマンツァにおけるこの見解の不一致は一見矛盾を示しているように見えるが、しかし批判の対象は常に『アイデア』であり、その他の論文や研究態度については、その真摯さと熱心さとを評価している。この様な評価軸はミリーツィアと同様である。

4. 19世紀の評論家の見解

4.1 レオポールド・チコニャーラの評論

19世紀にはスカモッツィに関する伝記が2つ存在するが⁽¹⁴⁾、その内のひとつであるチコニャーラのスカモッツィ伝は特筆すべき新たな視点で著されている。その新たな視点とは、スカモッツィに対する評価をダニエーレ・バルバロ（1514-1570）版『ウィトルウィウス建築十書』（以下『建築十書』と記す）を通して行ったことである。チコニャーラはスカモッツィの覚書が添えられている1567年にヴェネツィアで出版されたバルバロ版『建築十書』を所有していた⁽¹⁵⁾。つまりスカモッツィが使用していたウィトルウィウスの建築書をチコニャーラは手の中に収めていたのである。チコニャーラ曰く「私はヴィンチェンツォ・スカモッツィの長年の研究についての自筆の草稿を所有していた。そこには全てにわたって信じられぬほどの豊かさをもった批判的でしかも重要な所見についての手書きの注釈が添えられていた」⁽¹⁶⁾。この覚書とは、スカモッツィが青年期にウィトルウィウス研究を行った際の所見である。その所見は次の通りである。「私ヴィンチェンツォ・スカモッツィは、アクイラの優れたパトリアルカ、ダニエーレ・バルバロ殿下によって注解されたウィトルウィウスを読むことを、ようやく独りで成し遂げた。これは3度にわたって行われ、特筆すべき事柄全てを書き留めつつ行われた。[中略]これは1574年の4月4日から始められ、今日1574年の7月2日にまで及んだ。1度目は言うなれば朗読を聴いていた。2度目はゾッピーノの解説を要さず、それを楽しんだ。そして今日3度目には、それを批評した。つまり、今日価値ある成果を望む人にとって受け入れるべきもの全てを知ったのである。如何なる研究においても私は最も難く、

必要に迫られた建築に関する問題や建築家の要求を、彼（筆者補足：ウィトルウィウス）が完全に或は少なくとも論じたものから見出しながら、それらを身につけようと望んでいるのである。このことを仮に多くの人々が理解しているならば、彼を知るやいなや、彼に属する建築家としての自身を容易には自慢しえないことであろう」⁽¹⁷⁾。チコニャーラは、この覚書の内容がバルバロの前書きに記されている表明にほぼ忠実であることを指摘している。バルバロは『建築十書』の前書きにおいて、「建築の威厳（dignità dell'Architettura）」を前提に深い教養の必要性を説き、それによって理論と実践とを行わなければならないとしている。つまり「文学に通じた人々は、その理論と実践とを無益に励む。この様な卓越した出来事からなる二つの条件は、内容と絶対的な必要性である。例え人々が富や様々な事物、そして建築家という名声を欲しているとしても」⁽¹⁸⁾。この様にウィトルウィウスの要求に応じたと考えられるバルバロの見解に対して、チコニャーラは『アイデア』に示されているスカモッツィの理論と実践への要求に、それと通じる部分を見出し得ているのである⁽¹⁹⁾。

5. 20世紀の評論家の見解

5.1 フランコ・バルビエーリの評論

バルビエーリはスカモッツィ研究において数々の業績をあげている第一人者である。1997年には『アイデア』の復刻版が通称パッラーディオ・センターから出版されたが、バルビエーリはその監修を務めている。特に注目されることは、バルビエーリが1952年に『ヴィンチェンツォ・スカモッツィ』という伝記を所見を交えながら著していることである。また見開きA3判230頁からなるこの書物の6割程度が、スカモッツィに関する詳細な目録となっていることも注目される。

後述するツォルツィとプッピにも該当することだが、バルビエーリの研究は青年期のスカモッツィや作品紹介に力点がおかれるものが多い。バルビエーリのスカモッツィ伝に含まれる諸々の論文には「普遍的建築のアイデア」、「スカモッツィの思想の幾つかの目立つ点」、「新古典主義の予感」というタイトルが付けられているものも見られるが、それら全ては概説的であり、『アイデア』の体系的理解には至っていない。そもそもバルビエーリを含めたこの時代の評論家は『アイデア』の新しい評価軸を生成するために、スカモッツィの青年期から順を追って見直しを図っているように見受けられるのである。

バルビエーリの評論において特に注目される点は、青年期のスカモッツィが学んだ学校に関するアカデミア・オリンピーカ説を提唱したことにある。歴史記述家として高名なオッターヴィオ・ベルトッティ・スカモッツィ（1719-1790）がこの学校を次のように評価するように、アカデミア・オリンピーカはヴィチェンツァを代表する学校であった。「1555年の末、この町に著名な文学者と美しき芸術の愛好家の数人によって組織されたアカデミア・オリンピーカが設立された・・・知識人が集まるこの組織を誇りに思うことは、ヴィチェンツァの文芸の価値を高め、自然の模倣芸術の様式を完全にする効果があることである」⁽²⁰⁾。

バルビエーリは、このアカデミア・オリンピーカでスカモッツィは学んだと推察しているが、なるほどヴィチェンツァはおろかヴェネツィアの芸術家達も集うこの学校に、スカモッツィが含まれていなかったとは考え難い。当時のヴィチェンツァには幾つかのアカデミアが存在していたが⁽²¹⁾、これらとは異なりアカデミア・オリンピーカが「貴族階級やその他の格式にこだわらない」⁽²²⁾ということであれば、決して良いとは言えないスカモッツィの家柄を考慮すると、尚更にアカデミア・オリンピーカ説は濃厚となろう。従ってバルビエーリは「芸術家というよりは批評家としての精神、それらは都市部の熱気から遠く離れた田舎の穏やかな環境において、政府からの恩恵も受けながら、平穏な暮らしの中で人文主義者が好みの研究を追及し、存在する」⁽²³⁾アカデミア・オリンピーカにおいて、スカモッツィが青年期の教育過程を過ごしたと考えたのである。

またバルビエーリは、16世紀イタリアの建築書が特に北イタリアの建築家達によって著されていたことに注目している。周知の通り、セールリオはボローニャ出身、パッラーディオはパードヴァ出身、バルバロはヴェネツィア出身等々。バルビエーリはアカデミア・オリンピーカに関わった上記の建築家・理論家の名前を列ね、その教義との関連を見出している。つまり、当時の歴史記述家マルツァーリが曰く「詩、論理学、哲学、雄弁術、ラテン語と俗語の文芸、形而上学、数学、音楽、幾何学、算術、絵画、彫刻、建築、古代と現代の歴史、貴族やその他の賞賛すべき職業に関する教育などについて彼らはここで暮らし今まさに論じ合っている」ことこそが、それぞれの建築書を執筆する上での素養に成り得たと、バルビエーリは考えたのである⁽²⁴⁾。ヴィチェンツァ出身

であるスカモッツィが『アイデア』を著したその背景にも、アカデミア・オリンピーカにおいて培われた教養が見られることを、バルビエーリは主張しているのである。

5.2 ジャンジョルジョ・ツオルツィの評論

スカモッツィに関する論文「新しい資料に基づいたヴィンチェンツォ・スカモッツィの青年期（Ⅰ・Ⅱ）」においてツオルツィは、バルビエーリのアカデミア・オリンピーカ説に対してセミネーリオ・ヴェスコヴィーレ説を提唱し、またスカモッツィのローマ旅行にも注目している⁽²⁵⁾。

1566年、ヴィンチェンツァの司教マッテオ・プリーウリによって、スカモッツィ家の住居に隣接したサン・フランチェスコ・ヴェッキオの敷地内に、神学校セミネーリオ・ヴェスコヴィーレが創設された。この神学校は後に『アンドレーア・パッラーディオの生涯』を著したパーオロ・グアールド（1553-1617）が在籍していたところとして知られているが、ツオルツィはスカモッツィとグアールドの友好関係を証明する資料の発見により、セミネーリオ・ヴェスコヴィーレ説を確信している⁽²⁶⁾。またツオルツィは、スカモッツィの高いラテン語力にも着目し、文化的、娯楽的講義を主体においていたアカデミア・オリンピーカにはラテン語教育の講座が設けられていなかったが、一方のセミネーリオ・ヴェスコヴィーレにはラテン語の習得に力を注ぐ講座が設けられていた事実を指摘している⁽²⁷⁾。1580年、ヴェネツィア大使ジョヴァンニ・コッレールに捧げられた献納書において当時28歳であったスカモッツィは「完全」なるラテン語を披露したという事実も残っている⁽²⁸⁾。またツオルツィは『建築十書』に添えられたスカモッツィの覚書により、ラテン語を習得していなければ不可能なウィトルウィウス研究との関連も指摘している⁽²⁹⁾。

ロンコーネやポッロがローマ旅行を終えて間もないスカモッツィに面会したとき、彼らがスカモッツィに賛辞を与えたことは既に述べたが、これを裏づけるようにツオルツィはローマ旅行の内容を重要視しており、その時のスカモッツィに円熟した青年期を見出している。スカモッツィが行った最初のローマ旅行は1578年から2年間であるが⁽³⁰⁾、ツオルツィはスカモッツィがその2年間の全てをローマで過ごしていないものと指摘している⁽³¹⁾。ツオルツィによれば、スカモッツィはローマ滞在中、1579年の一時期ナポリに移動しているとする。この理由としてツオルツィは、スカモッツィがヴァティカンにおいてグレゴリウスを祀るジュリア礼拝堂の建設を見学し、「サン・ピエートロ広場にオベリスクを運ぶ際の、たいへん経験豊かで巧みな技法を理解する」⁽³²⁾ためであったとしている⁽³³⁾。この2度目のローマ旅行についてツオルツィは、「彼の人生の最も重要な出来事があった。つまり彼の運命を決定付けるものである」と述べている⁽³⁴⁾。ローマ旅行の直接の成果は、スカモッツィが1581年に著した『論考』である。スカモッツィの4つの論文と、ヴィンチェンツァの画家・彫刻家バッティスタ・ピットーニ⁽³⁵⁾の手による40の図版とを含んだこの著作に対してツオルツィは、この序文にはスカモッツィの高いラテン語能力が現れており、我々の評価に値する著作であるとしている⁽³⁶⁾。

さらにツオルツィは、ローマ旅行の内容にも注目している。スカモッツィは2度目のローマ滞在中に、「建設中の幾つかの建築物を見て以来、文学、数学、そして素描に関する研究を誠実に実践した」⁽³⁷⁾。つまり「幾つもの楽しみを抱いて」クリストフォーロ・クロヴィオ教父の講義が開講されている神学校に通い⁽³⁸⁾、そこで「極めて美しくかつ申し分のない、今なお称賛されている古代の作品の全てについて絶え間なく研究に没頭し、思慮と注意力を働かせることに専念した」⁽³⁹⁾。このようなスカモッツィの動向からツオルツィは、スカモッツィ曰く「数学者や建築家に共通する」⁽⁴⁰⁾諸法則を発展させたこと、さらに曰く「ローマやナポリのレーニョやその他の重要な場所において、特に著名な古代の作品を自ら評価することに専念した」⁽⁴¹⁾ことなどは、真実を見極める術を会得したことに他ならないと確信する⁽⁴²⁾。このローマ旅行についてスカモッツィは、「かつて生まれて以来、およそ10年間を通じて行い得なかったことを、この2年間における優れた成果によって獲得した」⁽⁴³⁾と自ら述べている。

また『論考』についてツオルツィは、セーリリオの建築書に見られる言葉や言い回し、そして「極めて豊富な目次」の影響が見られることも指摘している。つまり「ウィトルウィウスの建築書の目的を問いながら、建築物の立地条件の意味を探りながら、そして現地調査において確認した古代の遺跡の其々の立地条件や構造にいたるまでを踏まえながら」成されていると評価している⁽⁴⁴⁾。これについてツオルツィは、スカモッツィが建築を理解する固有の方法とそれを表現する方法とを、この円熟した青年期に見出したと指摘するとともに、スカモッツィの忍耐強さ、熱烈さ、勤勉さ、精緻さを見出し、高い評価を与えるに至っているのである⁽⁴⁵⁾。

5.3 リオネッロ・プッピの評論

16世紀当時の数多くの資料を集め、スカモッツィの青年期を明るみにしたツォルツィに賛辞を贈るプッピは、ツォルツィの成果に依りつつ、スカモッツィの青年期に新たな知見を加えた。プッピは『イデア』に見られる事物に対する諸々の認識の問題を青年期と結びつける試みを行い、スカモッツィの建築理論に関する新たな知見を開いた。

プッピはツォルツィのセミナリオ・ヴェスコヴィーレ説を支持しつつ、そこにスカモッツィの青年期の人間形成の内容を問うている。つまり「大きな利益と、それに反立する精神の豊かさとの問題をかかえながら、社会環境と己の存在する場所との摩擦を如何なる固有の条件のもとに解消したのか」⁽⁴⁶⁾。プッピはこの己の問いに対して、スカモッツィの遺言状に認められている「私は常に自由な人間として生きた。私は努力を惜みず、とは言うものの気楽に、自然から仕向けられるあの能力についての研究に専念し、生きた」⁽⁴⁷⁾という一節から、スカモッツィが語る「自由」の意味を『イデア』に見出していく。プッピは、スカモッツィが自由に固執しているところ、例えばスカモッツィが「建築家」と「大工の棟梁」との相違を明確にすることにより、建築家の自由を獲得しているところに着目する。スカモッツィは大工の棟梁たちが「経験することにより、そして現場において諸芸術を手掛けることにより得ることのできるある種の熟達した誠実さを購入し、経験に溺れ、最上位の存在として振舞う」⁽⁴⁸⁾ことを指摘する。それに対して建築家は「学制的知識」に裏づけされ「あらゆるものの経験を判断し指摘する」⁽⁴⁹⁾存在として語られている。これは、職人の努力もしくは自粛をもたらすために、その上に建築家をたてるべきことを意図している⁽⁵⁰⁾。すなわち「まさに一人の主人と幾人かの使用人の関係」⁽⁵¹⁾となることをスカモッツィは望んでいるのである。このように建築家に上位の立場を与えるスカモッツィの考えに対してプッピは、スカモッツィの自由への渴望を見出すことになる⁽⁵²⁾。それは何ものにも律されることのない精神の自由である。更に今ひとつ挙げるならば、プッピは次の一節に着目している。スカモッツィ曰く「私の祖先や両親がいた町であり、また私の生まれた町であり、青年期の教育を受けた町である。その後にはローマに関する重大な諸研究に専念した町であり、また最後にヴェネツィアの地に落ち着く世界の人々が、よく立ち寄った町である。」プッピによれば、この一節に記された「世界の人々」という言葉は、スカモッツィの展望が世界に開かれており、自身の境界を無限ならしめるような意味の象徴であるとする⁽⁵³⁾。そしてこの様なスカモッツィの主張は、「主知的な傾向のある人が総体的に有する考え方を暗示させる」ものであり、また「社会的な責任のあらゆる様相を離れて、研究に専念するという行為のなかで、固有の役割や気高さをともなう自尊心の正当化を意味する」⁽⁵⁴⁾ものであるとする。つまり「国際人としての適性のために開放的な立場を形成」⁽⁵⁵⁾するスカモッツィの渴望する精神の自由を、プッピは見出しているのである。

このようにスカモッツィの本質に精神の自由を見るプッピは、それを時代の精神に位置づけるよう試みている。プッピにあってはこの時代の精神とはマニエリスムの精神である。プッピはマニエリスムをルネサンスの精神的危機の時代と捉え⁽⁵⁶⁾、スカモッツィの精神の自由を必然の結果と見做している。つまり「経験と固有の立場との拡大に専念した必然の結果」⁽⁵⁷⁾とする。スカモッツィは建築家と職人とを「一人の主人と幾人かの使用人の関係」として規定した。これはスカモッツィが『イデア』を執筆する際の建築家の条件として示した、建築は「(プラトンが言及するように) 学であるため、それ故に諸々の確実で議論の余地のないほどの表現を遂げるのである。したがって数学やその他の同種のものに関して習慣として教えるべきである。これらはアリストテレスの言うように全て知識の表象なのである」⁽⁵⁸⁾という一節に反映されている。プッピによれば、スカモッツィのこのような主知的傾向は「建築家の知的自由の役割を客観的な立場によって保証される必要性から生じたものなのである」⁽⁵⁹⁾。また更には、「社会的な秩序のなかに具体的な二律背反をもたらさないように、文脈の中で抽象的な自由を獲得する」ものなのである⁽⁶⁰⁾。この最たる例証としてプッピは次の一節に注目している。「経験によって事物の道理を理解することや心得ることが芸術にとって有益であるということは全くの明白なる事実である。つまり芸術とは普遍的な知識と特殊な出来事からなる唯一の経験とを有する存在なのである。それゆえあらためて我々は芸術を追求する目的とともに芸術の能力を支配する建築家を、また単なる経験のみでも芸術を支配する建築家を、もっとも学識豊かで有能な人と考える。また建築家は最初に学によって事物を把握するがゆえに、もっとも優れた人と考える。このとき建築家は事物の細部がもたらす知識に到達し、普遍性をそなえた存在となるのである。つまり建築家は学の目的となるような、そして道理をあたえるような存在となるであろう」⁽⁶¹⁾。かくしてプッピは、バルビエーリの一節（「彼の時代を通じて大変著しい拡大を前提とする行為そのものにおいて、認識の基本となる

スカモッツィの折衷主義は彼の真実の様相を露呈する」を引用しながら、スカモッツィが「ある体系を考案しながら経験を介さない抽象に立脚した普遍主義的傾向において、厳しく緊迫した現実の問題との対決をうまく避ける」⁽⁶²⁾という指摘へと至るのである。このようにプッピが指摘するスカモッツィの精神性は、『イデア』に明白に述べられた信念、偏りを持つが故の不完全さ、成果を得るほうを好み問題の広がりやを弁明するような決定的な主張から免れている様などに示される」⁽⁶³⁾のような側面を持つのである。プッピは、このような現象をマニエリスムの傾向と位置づけるとともに、スカモッツィの建築理論についても同様の傾向が見られることを指摘しているのである⁽⁶⁴⁾。

6. 結 言

16 世紀から 20 世紀までの評論家によるスカモッツィおよび建築理論（『イデア』）への評価を見てきたわけだが、16 世紀には面識を持つもののみが知り得る、あたかもウィトルウィウスの正当な後継者と見做されるような卓越したスカモッツィの能力が示されていた。これは建築理論についての直接的な評価ではないが、彼の理論の卓越さを裏付ける評価とも見做される。18 世紀には体系的な伝記が著されるようになり、スカモッツィの人物像ばかりか『イデア』への評価も見られるようになった。ミリーツィアとテマンツァは建築家としての優秀さは認めながらも人間的な欠点を指摘し、『イデア』の評価を貶める結論へと導いた。19 世紀の評論家チコニャーラは、スカモッツィが所有してきた貴重な原資料によってウィトルウィウスとの関係性を強調し、建築家としての研究能力に高評価を与えた。この評価はスカモッツィの建築理論の有用性を証明する評価であるとも看取することができる。20 世紀には、スカモッツィの青年期の学習内容と出来事を通してスカモッツィの全体像を把握する分析が進んだ。これまでと同様にスカモッツィの建築家としての能力は認めつつも、この評論家たちの分析は『イデア』すなわち建築理論の完成度を貶める評価を下すものであった。

本稿において明らかにされた歴代の評価の特徴は、各評論家はスカモッツィの人間性と建築家としての能力を背景として建築理論（『イデア』）の評価を試みようとしたが、スカモッツィの時代の評価と後世の評価とでは内容が大きく異なっていたということである。この評価の相違は建築家としての能力を見ているのか、それとも人間的な性格を見ているのかという視点の違いによって生じていることは明らかである。『イデア』すなわち建築理論がどちらの視点によって評価されるべきなのか、これはスカモッツィ研究全体の発展に向けて避けて通ることのできない命題といえる。

註および参考文献

- (1) 伝記の起源はおおよそ紀元前 2 世紀頃であるとされており、紀元 1 世紀のローマ人プリニウスの『自然博物誌』所収の伝記は知られるところである。美術家個人が闇に埋もれていた中世を経て 15 世紀に入り、プリニウスの伝記を範としたギベルディの『回想録』が著された。16 世紀にはこれらの集大成に位置づけられるヴァザーリの『美術家列伝』が著され、伝記の形式が確立された。17 世紀にはヴァザーリを範としたローマの画家ジョヴァンニ・バリオーネやジョヴァンニ・バッティスタ・パッセルリによって伝記・列伝も著されたが、ジョヴァンニ・ピエトロ・ベッローリがこれまでの伝統的な形式に準じながらも新たな視点で伝記記述の形式を完成させた。この伝記・列伝の経緯については、清瀬みさを、十七世紀イタリアの美術家列伝をめぐる一考察—ベッローリの歴史的意義について—、文化学年報（同志社大学文化学会）、第 44 輯所収を参照した。
- (2) ドメーニコ版セルリオ全集については(4)を参照されたい。
- (3) Werner Oechslin, “Premesse a una Nuova Lettera dell’Idea della Architettura Universale di Scamozzi”, in Vincenzo Scamozzi, *Dell’Idea dell’Architettura Universale, Centro Internazionale di studi di Architettura Andrea Palladio (1997), [Iaed., Venezia, 1615], p.XXI, q.v.* ; *Tutte l’Opere d’Architettura di Sebastiano Serlio Bolognese, Et un’Indice Copiosissimo Raccolto per via di Considerationi da M.Gio.Domenico Scamozzi, Venezia(1584), p. (a 3 r.)*. 尚、引用した書簡の原文を付記しておく。
“Vitruvio della nostra età…con la grandezza del suo divinissimo intelletto”
- (4) Ibid., q.v.
- (5) 詳細は本稿の「ジャンジョルジョ・ツオルツィ」の章を参照されたい。
- (6) Werner Oechslin, op.cit., p. XXI., q.v.

- (7) Giloramo Porro, “Al Cral.s.Giacomo Contarino, fu del Clarissimo Sig.Pietro, Senator Veneto, Signore et Padrone Osservand,” in Vincenzo Scamozzi, *Discorsi sopra l'Antichità di Roma*, Edizioni il Polifilo, Milano(1991), [1aed., Venezia, 1583], n. pag.
- (8) Ibid.
- (9) Francesco Milizia, *Memorie degli Architetti Antichi e Moderni II*, Arnaldo Forni Editore (1978), p.88.
- (10) Ibid.
- (11) Tommaso Temanza, *Vite dei più celebri Architetti e Scultori Veneziani*, Edizione Labor, Milano(1966), [1aed., Venezia, 1778], p. 422.
- (12) Ibid.
- (13) Ibid., pp. 473-474.
- (14) 2つのスカモッツィ伝は次のとおり。Cicognara, *Catalogo Ragionato dei Libri d'Arte e di Antichità Posseduti dal Conte Cicognara*, vol.I, Pisa(1821) ; Filippo Scolari, *Della Vita e delle Opere dell'Architetto Vincenzo Scamozzi*, Treviso(1837).
- (15) Werner Oechslin, op. cit., p. XXII, q.v.
- (16) Ibid., q.v.
- (17) Ibid., op. cit., p. XXIII, q.v.
- (18) *I Dieci Librir dell'Architettura di Vitruvio, Tradotti e Commentati da Daniele Barbaro*, Edizioni Il Polifilo, Milano(1997), [1aed., Venezia, 1567], n. pag.
- (19) Werner Oechslin, op. cit., p. XXIV, q.v.
- (20) Ottavio Bertotti Scamozzi, *L'Origine dell'Accademia Olimpica di Vicenza*, Vicenza(1790), con una nota strico-critica di Loredana Olivato, a cura dell'Accademia Olimpica(1980), p. IX.
- (21) その他の代表的な学校として、研究・芸術・徳を基本原則とするジャンジョルジョ・トリッシーノ(1478-1550)が率いるアッカデーミア・トリッシニアーナを挙げることができる。Rudolf Wittkower, *Architectural Principles in the Age of Humanism*, Academy Editions, London(1998), [1aed, London, 1949], pp. 61-62.
- (22) Franco Barbieri: *Vincenzo Scamozzi*, La Cassa di Risparmio di Verona e Vicenza (1952), p. 25.
- (23) Ibid.
- (24) Ibid., pp. 26-32, q.v. 引用したマルツァーリの一節のオリジナルは、G Marzari, *Historia di Vicenza*, Vicenza(1604), Libro I, p. 5.
- (25) ツォルツィによるアッカデーミア・オリンピーカ説への否定の詳細については、拙稿「ヴィンチェンツォ・スカモッツィの青年期の教育―ヴィチェンツァでの教育」, 日本建築学会北陸支部論文報告集(2000)を参照されたい。
- (26) Giangiorgio Zorzi, “La Giovinezza di Vincenzo Scamozzi Secondo Nuovi Documenti I”, *Arte Veneta, Rivista di Storia dell'Arte*, X (1956), p. 121. なおスカモッツィとグアールドの友好関係を証明する資料とは、*Alcune Lettere Scritte nei Sec. XVI e XVII e non più Stampate Raccolte da Pietro Angelo di Caldogno*, Venezia(1835).
- (27) Ibid.
- (28) Ibid.
- (29) Ibid., p. 121ff.
- (30) 最初のローマ旅行が行われた年については、「トスカーナのヴィッラや付近の村落が崩壊した田舎において人々が山脈の裾野から離れて、すでに幾多の月日が流れた。これを見たのは最初のローマ滞在の少し前であり、我々は大変な驚きをもって、そこを通り過ぎた」(Vincenzo Scamozzi, op.cit., Parte Prima, Lib. Secondo, Cap. VI, p. 120.)と『イデア』に記されているその欄外に「1578年」という日付が添えられていることから明らかになる。
- (31) Giangiorgio Zorzi, “La Giovinezza di Vincenzo Scamozzi Secondo Nuovi Documenti II”, *Arte Veneta, Rivista di Storia dell'Arte*, XI (1957), p. 119. 以下この論文をIIと表記する。
- (32) Vincenzo Scamozzi, op. cit., Parte Seconda, Lib. Ottavo, Cap. XIX, p. 336.
- (33) Zorzi, op. cit., II, p. 119.
- (34) Ibid.
- (35) バッティスタ・ピットーニは、パッラーディオがペデムーロの職人組合で徒弟奉公をしていたときの師であるジローラモ・ピットーニ(Girolamo Pittoni)の息子である。テマンツァはピットーニの血統を「輪郭を描き、彫刻を施したにも関わらず、画家としては不毛であった」(Temanza, op. cit., p. 473.)と紹介している。
尚、パッラーディオとジローラモ・ピットーニの関係については、拙稿「石工職人時代のパッラーディオについて―ペデムーロの職人組合とトリッシーノを通して」, 日本建築学会北陸支部論文報告集, 第42号, 1999年7月を参照されたい。
- (36) Zorzi, op. cit., II, p. 120.
- (37) Vincenzo Scamozzi, op. cit., Parte Primo, Lib. Primo, Cap. XXII, p. 67.
- (38) Ibid., Parte Primo, Lib. Primo, Cap. X, p. 29.

- (39) Ibid., Parte Primo, Lib. Primo, Cap. XXII, p. 67.
- (40) Ibid.
- (41) Ibid.
- (42) Zorzi, op. cit., II, p. 121.
- (43) Ibid.
- (44) Ibid.
- (45) Ibid.
- (46) Lionello Puppi, “Vincenzo Scamozzi Trattatista nell’Ambito della Problematica del manierismo”, *Bollettino del Centro Internazionale di Studi d’Architettura A.Palladio* (1967), IX, p. 318.
- (47) Ibid., p. 320.
- (48) Vincenzo Scamozzi, op. cit., Parte Prima, Lib. primo, Cap. XXIX, p. 87.
- (49) Ibid, Parte Prima, Lib. primo, Cap. XXII, p. 66.
- (50) Puppi, op. cit., pp. 319-320.
- (51) Vincenzo Scamozzi, op. cit., Parte Prima, Lib. primo, Cap. IV, p. 13.
- (52) Puppi, op. cit., p. 320.
- (53) Ibid.
- (54) Ibid.
- (55) Ibid.
- (56) プッピはマルツァーリのアッカデーミア・オリンピーカの教義を述べた一節に注目し、アッカデーミア・オリンピーカの教義が当時の危機的状況を顕著に示しているとしている。つまりアッカデーミア・オリンピーカは「極めて折衷主義的であり、また文化に関する諸問題を普遍化するという抽象化の目的に基づいた明白なる傾向によって腐敗が顕著であった」。(Ibid., p. 321) これはバルビエーリも認めていることで、「アリストテレス主義的精神に深く根をおろしていたにも関わらず、新プラトン主義の誘惑に侵されていた」(Barbieri, op. cit., p. 27.) のである。プッピの指摘する 16 世紀イタリアの危機的状況とは、まさに個人の精神的腐敗が蔓延化した集合体であることを意味しているのである。
- (57) Puppi, op. cit., p. 323.
- (58) Vincenzo Scamozzi, op. cit., Parte Prima, Lib. primo, Cap. I, p. 6.
- (59) Puppi, op. cit., p. 324.
- (60) Ibid.
- (61) Vincenzo Scamozzi, op. cit., Parte Prima, Lib. primo, Cap. XXIV, p. 71.
- (62) Puppi, op. cit., p. 325.
- (63) Ibid.
- (64) Ibid.

(平成 28 年 3 月 31 日受理)